

1 研究主題

「思いや願いを明確にもち、学習対象と繰り返し関わろうとする子どもの育成」

2 研究主題について

(1) 研究総論との関連

研究総論は2年次の研究重点を『「ともに学び、学び抜く子供」の姿を再検討し、めざす子供の姿を実現するための手立てを追究する』こととし、そのために『意欲』『粘り強さ』に働きかける手立て、そのほか『「ともに学び、学び抜く子供」の実現にむけての手立てを追究する』ことを研究の手立てとしている。生活科でも1年次の研究から「意欲」「粘り強さ」に注目し、学習指導要領解説生活科編及び「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料をもとに以下のように「意欲」「粘り強さ」を整理し、生活科の学習においても重要な要素であるとして研究を進めてきた。

意欲 …明確な思いや願いを友達と共有し、その実現に向けて進んで学んだり、生活を豊かにしたりしたいという気持ち（学習指導要領解説生活科編における定義）

粘り強さ…「学習の調整」、「実感や自信」と合わせ「学びに向かう力、人間性等」を評価する際に踏まえる視点、「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料における捉え）

「意欲」は、学びや活動を発動させるものであり、思いや願いと重なる部分が多い。「粘り強さ」は学習対象と繰り返し関わることを支えるものであり、学習対象と繰り返し関わる中で子どもたちの気付きの質が高まっていく。「粘り強さ」について「思いや願いの実現に向かおうとしている」姿は、学習対象によって様々な表れ方をすると考えられる。様々な表れ方から共通点を検討し、「粘り強さ」を「学習対象と繰り返し関わりたいという気持ち」であると捉えた。2年次では1年次で見られた子どもの姿から「意欲」「粘り強さ」を発揮する子どもの姿を検討し、「ともに学び、学び抜く子供」の姿を再検討する。そして、これらに働きかける手立てを追究していく。

(2) 1年次研究より

1年次研究では、「自らの思いや願いを明確にもち、学習対象と繰り返し関わる姿」の実現にむけて、①学びの環境設定②思いや願い、気付きを共有する場の設定の手立てを用いて授業実践をし、以下の成果を得た。

成 果	<p>①単元の展開に応じて学びの環境構成を4つの視点で設定することで、子どもたちが思いや願いをもち、学習対象との関わりの質を高めながら、繰り返し活動する姿を確認することができたこと</p> <p>②①の結果、多くの気付きが生まれたこと、それらを共有する場を設けることで次の思いや願いを見出し、活動を次の活動へとつなげる子どもの姿を記述から見取ることができたこと</p> <p>③①②の子どもの姿から生活科の学習において子どもが「意欲」と「粘り強さ」を発揮することで活動の質が高まり、気付きの質が高まることを確認できたこと</p>
--------	--

子どもが「意欲」を発揮することで活動の質が日常生活と結びつきながら高まっていく姿を確認できた。例えば「紙飛行機を上手に飛ばしたい」という思いや願いをもった子どもは、家族や友達に聞いたり、家で作ってみたりするなど試行錯誤していた。さらに学習が終わった後も「家でも家族と紙飛行機で遊びたい」という思いや願いをもって紙飛行機の遊びを続けていた。

子どもが「粘り強さ」を発揮し、学習対象との関わりに手応えを感じ、誰かに「教えてあげたい」「～してあげたい」という思いをもつ姿も確認できた。さらに、学習対象との関わりが友達や保護者など周囲の人との関わりとも結びつきながらその幅を広げていく様子も確認できた。例えば、カナヘビを育てている子どもは、「育てて気付いたことを友達にも教えたい」という思いや願いをもち、カナヘビとの新たな関わり方を見出して詳しくカナヘビを観察していった。お正月遊びをした際に、子どもが誰かに体験して欲しいという思いや願いをもち、教師の提案もあって大学生との交流会が企画されたが学級閉鎖で中止になってしまったことがあった。その際にも、次の自分の成長を発表する活動で保護者と福笑い対決を企画し、当初とは違った形ではあるものの思いや願いの実現を目指す子どももいた。このような子どもの姿から、以下の「意欲」「粘り強さ」を発揮する子どもの姿を見出した。

「意欲」を発揮する子どもの姿

a-1 学習対象との出会いから思いや願いをもつ姿

子どもにとって関わってみたいと思える学習対象の選定、教師による学習対象との出会いの演出などの手立てから学習対象との関わりに期待をもち、「やってみたい」と思う子どもの姿

a-2 気付きから次の思いや願いをもつ姿

気付きの共有や振り返りを経て、「もっとしたい」「次は～をしたい」「うまくいかないからなんとかしたい」と次の思いや願いをもつ子どもの姿

a-3 学習対象との結びつきが深まることで学習の枠を越えて、思いや願いをもつ姿

適切な場面での振り返りで学びの手応えを感じられたことから、授業外や単元終了後にも自分の生活に学習対象との関わりを取り入れる子どもの姿

「粘り強さ」を発揮する子どもの姿

b-1 気付きの質の高まりからさらに質の高い関わりを目指し活動する姿

気付きの共有場面を設定することで気付きの質が高まり、さらなる思いや願いをもち、改めて学習対象と関わろうとする姿

b-2 思いや願いの実現にむけて学習の枠を飛び越えて活動する姿

思いや願いを明確にもったことや、活動の手応えを得たことで、「もっとやりたい」、「生活科の時間じゃなくてもやりたい」と日常生活に学習対象との関わりをもち込んで楽しむ姿
うまくいかない時もなんとかしたいと思い、授業外でも活動に取り組む姿

a-2 と b-1 は、気付きの質の高まりから活動を次の活動へとつなげている点で似ていたり、a-3 と b-2 は、活動の場を授業外に広げる点で似ていたりして、「意欲」「粘り強さ」を発揮するする子どもの姿には重なりがある。そこで2年次の研究では、「意欲」「粘り強さ」を個別に捉えることはせず、一体的なものであり、両者が発揮されることで「ともに学び、学び抜く子供」の姿を実現するものであると捉えるに至った。これらに働きかける授業を構想することで2年次研究では、「意欲」「粘り強さ」に働きかける手立ての追究を進めていく。

(2) 生活科で考える「ともに学び、学び抜く子供」の姿について

1年次の研究を踏まえ、「ともに学び、学び抜く子供」の姿を以下の通り設定した。

周囲の人と結びつきながらともに学び、生活や学習から得たことを生かして学び抜く子どもの姿

2- (1) で示した通り、「意欲」と「粘り強さ」が発揮されることで、子どもが周囲の人と結びつき学びを広げていくことできる、授業の枠を飛び越えて学びを続けていことができる。これらが生活科の学びの特徴であり、魅力である。このような学びを可能とするのは、具体的な活動を通して学びが行われること、学習対象が子どもにとって親しみ深いものであることである。この魅力を存分に味わう子どもの姿こそが本校生活科の目指す子どもの姿である。そのためには、子どもが学習対象に主体的に関わり親しみをもつことができるように教師が活動を構築する必要がある。そのような活動を構築する上で重要となってくるのがそれぞれの子どもが幼児期までに積み重ねてきた学びである。例えば、1年生の入学当初、子どもたちが一番よく手をあげる発問は「保育園、幼稚園の時は、どうしていましたか。」である。1年生の子どもたちは幼稚園、保育所では最上級生であった。そのことを教師から問われれば、子どもたちは意気揚々と語ってくれる。知っていること、見通しがもてることなら安心や親しみを感じ、積極的にになれる。こういった見方・考え方を生かすこと、つまり子どもがすでに有している見方・考え方を生かすことが生活科における身近な生活に関わる見方・考え方を生かすことであり、子どもが主体的に活動するために重要な点である。1年生の初期だけでなく、2年生も、「1年生の秋祭りでやったお店みたいに時間で区切ったら、いいと思う。」というように生活科の経験を生かして新たな活動に取り組む姿が見られる。2年間を通して見られる学びの在り方である。

このように子どもの身近な生活に関わる見方・考え方を生かすことが「ともに学び、学び抜く子供」の姿を実現するために重要となってくる。そこで2年次は、1年次の手立てに「身近な生活に関わる見方・考え方を生かすことのできるものであるか」という視点を取り入れて検討していく。

3 研究内容 「ともに学び、学び抜く子供」を育むための授業について

1年次の研究をもとに以下の2つの視点から授業づくりの手立てを講じる。

①学びの環境構成

子どもが思いや願いを明確にもち、活動に没頭できるための手立てを環境構成として設定していく。その際、人、物、場所、時間の4つの視点で重視する点を絞りながら考えていく

②思いや願い、気付きを共有する場の設定

思いや願い、気付きを表現する場を定期的に設定することで、思いや願いを共有したり、気づきの質を高めたりする

(1) 学びの環境構成

1年次に設定した環境構成の視点は以下の通りである。

人 …板書・発問・声掛けなど教師の働きかけや個人、グループなど活動の人数の規模
物 …学習対象そのものや活動で使用する物品の質・量
場所…活動する場所や物の配置など
時間…活動のタイミング、活動時間と回数(45分×1回、15分×3回など)

これらを「身近な生活に関わる見方・考え方を生かすことのできるものであるか」という視点を取り入れて検討していく。例えば、夏の季節と関わる活動を設定する際には、内容（５）季節の変化と生活、内容（６）自然や物を使った遊びを組み合わせることで単元を計画することになるが、まずは子どもがやってみたくて強く思う、遊びをすることを単元の導入として、夏の遊びの心地よさを味わったところで季節の変化に目を向けていくという計画を立てることで、子どもの思いや願いに寄り添っていきけるような単元を計画していく。そのために、特に物の視点で学習対象の選定を工夫したり、時間の視点で活動のタイミングを工夫したりしていく。このように、どのような活動を経ると、子どもたちが見方・考え方を生かすことができるか検討し、環境構成をしていく。

（２）思いや願い、気づきを共有する場の設定

<p>話し合いによる思いや願いの共有</p> <p>①子どもが思いや願いを表現し、教師が板書する</p> <p>②「なぜそうしたい」のかを問うことで背景にある幼児期までの経験を交流する</p> <p>③他の子どもの関連する経験も交流する</p>	<p>ICTを用いた思いや願いの共有</p> <p>○前時のふりかえりの際に本時への思いや願いもタブレット上に記述する</p> <p>○本時の導入時にも思いや願いを記述する時間を設定する</p> <p>○タブレット上で子ども同士の思いや願いを共有し、それらを見た上で本時の活動を子どもたちがそれぞれ設定する</p>
<p>活動後の表現</p> <p>気づきを以下の手順を基本に交流したり、振り返ったりする</p> <p>①教師の発問に対して、本時の気づきを表現する（教師は必要に応じて問い返す）</p> <p>②関連する気づきを交流する</p> <p>③気付いたことに関する振り返り</p> <p>④次の活動への思いや願いの交流</p> <p>⑤次の活動のゴールイメージの共有</p>	
<p>記述による振り返り（なにしたのカード、クラスサイト）</p> <p>学習の区切りごとに振り返りを記述する。振り返りをその場で、一目で見渡すことができるように1枚紙のワークシートやICT機器を活用してこれまでの学習を一覧出来るようにしていく。どの方法を活用するかは、子どもの発達段階や、単元の性質などを考慮して柔軟に変更していく。</p>	

これらの活動を様々な表現形態（言語化、動作化、実演、活動中の画像や動画の提示、情意に紐づいた表現を引き出す問いかけ、図式化、思考ツールを活用など）で行い、思いや願い、気づきを仲間と共有する。2年次では、単元計画の中で、伝え合いの形式だけでなく、タイミング、頻度なども検討していく。またこれらを見取りの際の資料としても活用する。

〈引用文献・参考文献〉

- ・独立行政法人教職員支援機構「小学校学習指導要領生活科改定のポイントと指導の改善・充実」2021年
- ・国立教育政策研究所「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料小学校生活科」2020年
- ・小塩真司「非認知能力：概念・測定と教育の可能性」2021年
- ・文部科学省「小学校新学習指導要領（平成29年告示）解説生活編」2018年
- ・山梨大学教育学部附属小学校「2022年度研究紀要」2022年